



御修復のあゆみ 〱 伝承された先達の願ひ

御影堂門耐震補強に使用する木を調達 その二

本誌二月号では、御影堂門の耐震補強に用いる木材は年輪が細かく目の詰まった密度の高いものが求められ、このような良材を求めて調査した結果、愛知県豊田市の山林に樹齢百五十年〜二百年(推定)の良質な檜が見つかり、伐採の運びとなったことについてお伝えしました。今回は、その伐採作業についてお伝えします。



木の上にワイヤー(中央)をかけ固定する

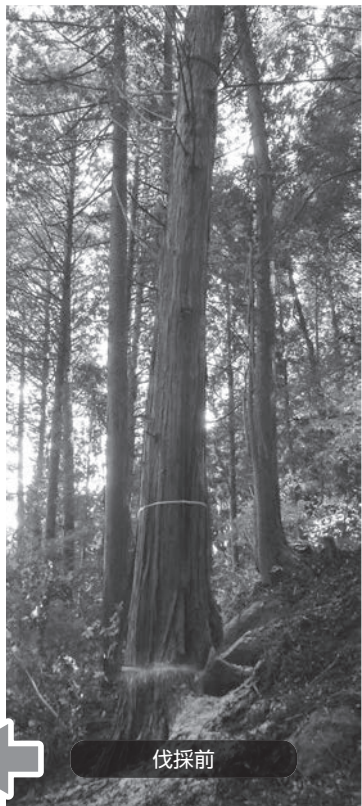
作業では、はじめに伐採する木を倒す方向や角度を確かめ、あらかじめ倒す方向をコントロールするためのワイヤーをかけるなど、時間をかけて万全な安全対策が行われます(写真・下)。

高さ十五mもの大木はその後、熟練の職人さんによって交互に確認しあいながらチェーンソーで伐り進められていきます。木の芯の近くにチェーンソーが入っていくと、辺り一面に檜の芳香が漂い、檜が揺らぎはじめます。すると、木は「ギィ〜」という音を出し、職人さんの「木が泣いて、寝るぞー」(※伐採時、森にこのような音

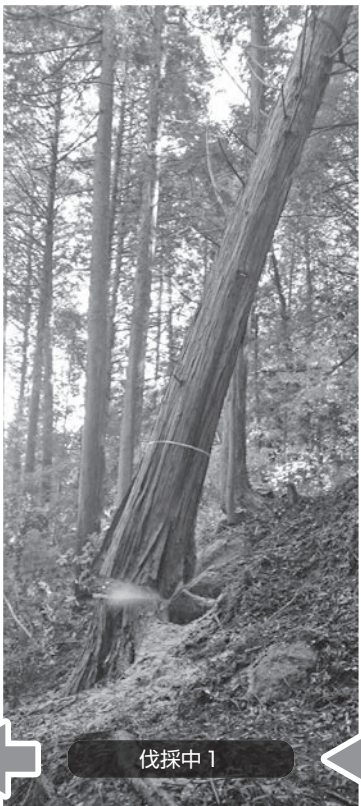
が響いて倒れること)というかけ声の直後、「ピシッ」という鋭い音とともに勢いよく地面に倒れました。一瞬の出来事ですが、数百年育ってきた木が、今、まさに命を終え、これからは材として建物を数百年支えていくことになるということに深い感動と感謝の気

持ちが自然と起こってきます。また、目的の木を伐採するためには、事前に邪魔になる周辺の木をも伐採する必要があるため、職人さんは木の一本一本に御礼を言いながら伐採を進めていくのです(事前に伐採された周辺の木もあらためて製材され、別途に使用されています)。

伐採が終わった後に職人さんが、切り倒した木の梢(幹や枝の先の部分)をその根株にさしました(写真左頁・下)。これは、「この梢と根株の間の幹を大切に使用させていただきます」との誓いと、「この根株に種が落ち新しい命が宿り(芽が出て)成長し、やがて大樹になるように」との敬いの心か



伐採前



伐採中1



伐採中2



伐採後

ら行われるのだそうです。今回お世話になった山主(山の所有者)さんも木を伐られた職人さんも、実は真宗大谷派のご門徒であり、「門徒として本山に届けるための用材を伐るご縁をいただき本当にありがたいことだ」とその喜びを語られ、一本の木の調達

にあっても、そこに関わる職人さんや全国のご門徒の願ひが込められていることをあらためて知らされました。

御影堂や阿弥陀堂、御影堂門といった真宗本廟の諸殿は単にその大きさを誇るものではなく、親鸞聖人の墓所にはじまり、そこにやがて人々が集い教えを聞き、信仰の根本道場(帰依処)として受け継がれてきた願ひを、次世代につなげていかねばならないと強く思うものでした。



梢(こすえ)を根株にさす